

令和5年9月16日

北関東フォーラム

於：シムックス

中齋塾 北関東フォーラム

令和5年度 第8回

真向法知足会発足

おはようございます。2か月ぶりのフォーラムです。私は夏の間、赤城山にこもっておりました。驚いたことに、山荘の敷地内に熊が入ったようで、木の実を取ろうとして木を爪で引き裂いた跡がありました。熊もこの辺りまで出てくるようになったのだなと思いました。その後、熊の嫌がる薬剤を散布したり、木を切り倒してもらいました。

ということでこの夏、私は新しいと申しますか、驚く体験を致しました。皆様方はいかがでしょうか？ 夏の間に関何か新しい試みを始められた方、もしくは新鮮な体験をされた方はおられますか。

私ごとを申しますが、渋谷にある公益財団法人真向法協会というところに約1年通い、筋肉をほぐす体操を続けました。以前から私は、「体の柔らかい人は頭も柔らかい。体の硬い人は頭も固い」と申し上げています。それをここ1年、特に夏場は実感しました。

幹事会で岡本理事長から話があったと思いますが、来月10月22日に真向法知足会を立ち上げることに致しました。皆さんのお手元に発足式の案内が置いてあります。自分で自分の体をほぐす、柔らかくしていく実地体験ですので、お時間のある方は是非お出で戴きたいと存じます。

一つご紹介します。休憩の時間に鏡の前に立って、両手を横にだらんと垂らしてみてください。右と左が同じぐらいの高さに揃っていれば普通の体です。筋肉が強張って硬くなっていると下までだらんと垂れませんから、高さが揃いません。そうすると身体のあちこちに弊害が出てきます。若い時はそれなりに体力があるけれども、だんだん歳を重ねるにつれて色々な病気にかかると思っています。

中齋塾フォーラムは、私が今まで習い得たものを社会に還元したい、今までお世話になったものを社会にお返ししたいと考えてスタートさせました。真向法知足会も同じような動機で、社会への還元と同時に自分自身の体にもご褒美をあげる必要がありますから、その一つとして体を柔らかくするというをお伝えしたいと思いスタートさせて戴きます。

素読の前に、先ほど井澤代表幹事が開会挨拶で話された中江藤樹の話に触れましょう。

人間はいつ志を立てるか、立志がポイントだと思います。それは小さい時に志しても良いし、大人になってから志しても良い。勿論お年寄りになってからでも志を立てることはあります。年を重ねれば重ねるほど、自分自身のためにといいよりは世の中のためにといいう動機が出てくると感じます。

中江藤樹の場合は11歳の時、大学を読み、涙を流して「聖人になる」と決めるわけですから、これは大変なものだと思います。聖人になりたいと考えて、そのための努力を日々続けて、晩年には聖人と言われるようになった。亡くなった後は、「近江聖人」という名称で世間に広がりました。11歳の時に志を立てた人間が、日々努力に努力を重ねていくと、聖人と言われる域にまで達したという実例です。日本の歴史を見ても、聖人と言われるのは中江藤樹一人だと私は思います。やはり、立志のしからしむるところでしょう。ですから何歳に志を立てても良いと私は思っています。

もう一つ、井澤代表は中江藤樹が懸命に教えた大野了佐についても触れていました。大野了佐は今で言えば知的障がい者で、午前中に教えたことを午後には忘れてしまうような人物です。普通の先生であれば諦めて教えませんね。しかし中江藤樹は、時間をかけて何度も何度も繰り返し教えた。当然、他の弟子たちから不平不満が出るわけです。それに対して藤樹が、「あなた方は大野了佐より遥かに能力があるではないか。能力のない者に私は全力を傾けて教えているのだから、あなた方もその様子を見て自分で頑張りなさい」と返すと、弟子たちは渋々納得し、独学を始めるという具合でした。ですから大野了佐が弟子に加わったことによって、いわゆる異物が入ったことによって、藤樹塾が活性化したと見えます。

藤樹の指導の甲斐あって、大野了佐は一人前のお医者さんになりました。そのおまけで、藤樹が医者を目指する人を弟子にとって、お医者さんに育て上げたという事例が残っています。

中江藤樹の教育に関する情熱と実行力は凄まじいものがあるなと思います。現代でも中江藤樹という人物に引き付けられるわけですから、影響力は残っているなと感じます。

知

では、論語の素読に参ります。今日のテーマは「知」についてです。知識というものを頭に置きながらどうぞお読み下さい。

初めて参加される方もおられるので、最初に少し説明しておきます。「子」とは先生という意味です。ですから孔子は、孔先生という意味です。「子曰く」は、先生がおっしゃるには・・・ということだから、昔は「子(し)、のたまわく」と読みました。「子(し)の、

たまわく」という読み方もありました。現在は小学校等で論語を読む時には、「子（し）、いわく」と教えていますので、それが普通であると思って下さい。同じ言葉でも奥行きがあります。その奥行きを知ること自体は知識の一つになります。なるほどそういう読み方があるのか、ということでご承知下さい。

① しいわ 子曰く、これ 之を知る者は、し 之を好む者にこれ 如かず。之を好む者は、これ 之を楽しむ者にこれ 如かず。この（雍也第六・18）

何かを知っているという人は、それを好きだという人には及ばない。好きだという人は、それを楽しんでいる人にはかなわない。

始めて参加された富澤さんは、何か好きな趣味はありますか？

（富澤会員）・・・パソコンをいじるのは好きです。

ではここを、パソコンをいじるということでの解説に致します。皆さんはパソコンという名前を知っているし、パソコンを見ていると思います。これも「知」（知識）ということになります。最初はどのようなものか分からないけれども、操作の仕方を覚えると知識が増える。知識が深まってどんどん操作が出来るようになると、面白いと思う。これは「好む」になります。

「好む」という状態になると、他の人から聞かれたら教えることが出来ます。そうするとパソコンに触っている時間が楽しくなって、だんだん自分とパソコンが一体化してくる。80歳を過ぎてからゲームソフトを作ったお婆さんがいましたが、その方は「楽しむ」という段階に入ってしまったということだと思います。

ですからここは、孔子がお弟子さんに、今お前は知識の段階なのか、好きだという段階なのか、それとも楽しむ状況までレベルが上がったのか、自問自答してごらん・・・と言っていると解釈すればよろしいでしょう。

ちなみに洪澤栄一は晩年、「私には社会事業を楽しむ癖がある。この仕事は世の中のためになる事業だと思えば、寄付を募って、その金を渡したくなる」と言っています。実際、洪澤栄一は奉加帳を持って商工会議所等で寄付を集めて回り、「社会事業の為に尽瘁するのは私の無上の楽しみになっている」と語っていたという記録があります。

② しいわ 子曰く、ちしゃ 知者は水をみず 楽しみ、たの 仁者は山をじんしゃ 楽しむ。知者はやま 動き、仁者はたの 静かなり。ちしゃ 知者はうご 動き、仁者はじんしゃ 静かなり。

ちしゃ たの じんしゃ いのちなが
知者は楽しみ、仁者は 寿 し。(雍也第六・21)

知者(知識人)は水が流れるように決断が早い。即断即決をする。水はとどまらないから活動的である。結果として、知者は自分自身も楽しむ。

仁者(徳の高い人)は山のようにどっしり落ち着いて、ものに動かされない。騙されない。煩わされない。そういう人物になる。結果として健康長寿がご褒美でついて来る。

③樊遲 知を問う。子曰く、人を知ると。(顔淵第十二・22)

孔子のもとには沢山のお弟子さんが集まって来ました。そのお弟子さん達に向かって、孔子が講義をするわけです。孔子が人生に関して語り、政や経済に対して語り、お弟子さん達の知識を高め人物としての力量を上げる。結果として、各国から大臣クラスで迎えられるような人材が孔子塾から育っていきました。ですから孔子のもとに集まるお弟子さん達は、政治家や官僚になるための就活で集まって来ています。

樊遲は孔子より 36 歳若い、孔子から見れば子供みたいなお弟子さんで、ちょっと頭の巡りが遅い。その樊遲が孔子に、知とは何かを質問しています。孔子は相手にあわせて答え方を変えています。

君は先ず知識を身につけなさい。知識を身につけるためには、人を知れば良い。人をよく見れば、心の動きが見えてくる。心の動きが見えてくると、その人に備わっている善悪が見える。

人の善悪について池波正太郎は、「悪人と言われる人間でもどこかで小さな良いことしている、人に見えないところで善行は積んでいるものだ」と書いています。同時に、あの人は良い人だと評判が立っていても、どこかで何か悪いことをしていることがありますね。

④子曰く、知者は人を失わず。亦言を失わず。(衛霊公第十五・7)

渋澤栄一はここを、「人生を生きていく上での教訓」という言い方をしています。論語の解説本の中で私が一番好きなのは渋澤栄一の『論語講義』ですので、渋澤栄一の解説をよく引き合いに出しています。

共に語るにたる人と語り合うのはよい。しかし、共に語るべき人でない人と語り合っ

も、時間の無駄である。相手によって話をする内容を変えなければいけないということです。

例えば、私が論語でその道の一流と思われる方とやり取りをするのは、非常に楽しいわけです。しかし、その時話したものをそのまま初参加の富澤さんに言っても、ちんぷんかんぷんだと思います。そうすると全然面白くないからフォーラムに来なくなってしまいかもしれません。つまり「人を失う」ことになります。

また、ちんぷんかんぷんの人に努力して話をして、分からないから無駄になる。そして自分も疲れ切ってしまう。つまり「言を失う」ことになります。私はかつて、精魂込めて相手に話をしたけれども全く伝わらず、効果がなかったと実感した時、一気に視力が落ちたという経験をしたことがあります。

⑤と⑥は同じものですから、一緒に解説致します。論語は孔子とお弟子さんのやり取りが書いてある、孔子の言行録であり会話録です。孔子の死後、弟子たちが孔子から教わったものを残したいと作られたのが論語です。ですからこれは、別のお弟子さんが記憶したということでしょう。

⑤ しいわ 子曰く、ちしや まど 知者は惑わず。じんしや うれ 仁者は憂えず。ゆうしや おそ 勇者は懼れず。（子罕第九・28）

⑥ じんしや うれ 仁者は憂えず。ちしや まど 知者は惑わず。ゆうしや おそ 勇者は懼れずと。（憲問第十四・30）

知者（智恵のある人）は、そうそう迷うことはない。仁者（仁徳のある人）は、くよくよ心配をしない。勇者（勇気のある人）は、人や物を恐れることはない。

知識のある人間は、迷わず学問に取り組む。学問に取り組む時は、まず知識から入らなければいけない。知ることがスタートである。だんだん徳を積んで仁徳が身についてくると、私心がなくなり色々なことを煩悶しない。勇者は何か怖いと思う事があっても、勇気を奮って果敢に実行していく。

渋澤栄一は、「明治天皇は、知・仁・勇の三つの徳を備えておられた」と残しています。

⑥は子貢という弟子と孔子との会話の一部です。子貢は、頭が切れて行動力があるお弟子さんです。孔子が弟子たちを連れて諸国を歴訪する事が出来たのも、子貢がお金を稼いだからです。その天才肌の子貢に孔子が、「君子には仁と智と勇が必要だ。私はどれも出来ていない」と言った。それに対して子貢が、「仁と智と勇を備えた君子とは、ご自分のことを言っておられるのではないですか」と答えたという会話です。

⑦子 曰く、^{し いわ}知を好みて^{ち この}学を好まざれば、^{がく この}其の蔽や^{そ へい とう}蕩なり。（陽貨第十七・8）

「六言六弊」という言葉があります。世に素晴らしいとされる六言でも弊害がある、と孔子が語っている章句の一部です。

先ほど休憩時間に、田島監事が質問に来られました。田島監事は亦楽会という論語の勉強会の会長をされていました。事前に調べられたそうですので解説をお願いします。

（田島監事） 板書

| 六 言 | 学問をしないと・・・(弊害) |
|---------|----------------|
| ①仁 (人情) | 愚 (おろかさ) |
| ②知 (知恵) | 蕩 (とりとめのなさ・妄想) |
| ③信 (信念) | 賊 (過信) |
| ④直 (公正) | 絞 (いき苦しき) |
| ⑤勇 (勇氣) | 乱 (乱暴) |
| ⑥剛 (強気) | 狂 (狂気) |

孔子が子路に、良いことを学んでも学問をしなければ良くなってしまおうと教えています。子路は極端なところがあるので、敢てこのように論じたのだと思います。論語は中庸（ほどほど）の徳を重んじています。良い事を学んでも、極端すぎると結果的に良くないという事だと感じたので質問を致しました。

・・・田島監事、有難うございます。

六言は良い言葉ばかりが書いてあります。良いことであっても、これをやり過ぎると、陰にはこれだけ困った弊害があるということです。少し補足しましょう。

○^{じん この}仁を好みて^{がく この}学を好まざれば、^{そ へい ぐ}其の蔽や愚・・・仁徳を積もうとしても、学ぶことをしなければ他人から馬鹿にされる。「大人は大愚に似たり」（大人物は一見したところ愚か者に見える）という言葉があります。西郷隆盛もその一人でしょう。一見したところ愚か者なのか素晴らしい人物か分からないという評価が残っています。仁には愚があるということです。

○^{ち この}知を好みて^{がく この}学を好まざれば、^{そ へい とう}其の蔽や蕩・・・博識とは何でも知っているように見えるけれども、表面だけの知識では役に立たない。「蕩」は、行き当たりばったりの人生と

捉えて下さい。その時その時でやらざるを得ませんから、周りに弊害が出るということです。

○^{しん この がく この}信を好みて^{そ へい ぞく}学を好まざれば、其の蔽や賊・・・信念があると、一瞬違う方向にいつてしまう事があります。最近、そごう・西武がストライキをやりました。ストライキで思い出したのは、昔、革マル派という党派がありました。氣になって調べたら、殺人を犯していました。今でも完全には消滅していません。過信が行き過ぎて、殺人まで行った団体と捉えます。

○^{ちよく この がく この}直を好みて^{そ へい こう}学を好まざれば、其の蔽や絞・・・「正直者が馬鹿を見る」という言葉があります。馬鹿正直で一所懸命やればやる程、その人が上に立っている人であればなお更、周りの人たちは息苦しくなる。厳しすぎるから苦しくなります。あまり正直を前面に出し過ぎるのも、ちょっと考えものだと受け止めれば良いでしょう。

○^{ゆう この がく この}勇を好みて^{そ へい らん}学を好まざれば、其の蔽や乱・・・勇氣がなければ生きていけないけれども、勇氣もあり過ぎると粗暴になる。勇氣があり過ぎると、自分の力を試してみたくなる。したがって自分を粗雑に扱うことになるから危ないとお考え下さい。武術を習って身につけばつく程、穏やかな人物になっていますね。今朝も朝稽古で山崎先生に棒術を教わりましたが、教え方がとても穏やかで分かりやすい。やはり経験のしからしむ所だと思います。

○^{ごう この がく この}剛を好みて^{そ へい きょう}学を好まざれば、其の蔽や狂・・・強氣は狂乱・狂氣に至る。

この「六言六弊」は、子路に対して言った台詞です。子路は表面は粗暴に見えるけれども、根っこは正直者で真っすぐな素晴らしい人物です。孔子の言うこと全てを100%信じて、それを実行しようとする。孔子が新しいことを教えようとする、教わったことがまだ実行出来ていないから先の事まで教えないで下さいと言ったという話もあります。そういう子路を、孔子は大変可愛がったという逸話も多くあります。子路は戦で死ぬ間際、孔子の教えを守り、冠をきちんと被り直して死んだと伝えられています。子路の遺体は切り刻まれて、ししびしお（塩辛）にされました。その話を聞いた孔子は、家にあった塩辛の甕を割って、子路を悼んだという話は有名です。それほど孔子とお弟子さんとの信頼関係は深いものだったのだと感じます。

恒例の質問

では、恒例の質問をさらっと参ります。夏の間は如何だったでしょうか、お聞きします。

- 夏の間、良い日が続いている方
- 夏の間、嘘はつかないし、嘘もつかれなかった方

- 夏の間、有難うと言う事が多かったし、有難うと言われることも多かった方。
- 夏の間、自分流の身体の手入れをよくやった方
- 夏の間、自分磨きをよくやったと思う方
- 眠る直前、明日以降を過去形で考えて寝た方

だんだん手を挙げる方が増えました。結構なことです。先ほど山崎先生に伺ったら、眠る直前に明日は何と何と何をやる、何はよく出来た、何はよく出来た・・・と考えたそうです。それは明日のことを過去形で考えることですから、大変良い眠り方だと思います。

令和5年を考えるー癸卯

では、テーマに参ります。

・繁栄か没落、岐路の年

何度も申し上げているように、日本はもう完全に衰退をし続けている。没落の坂道を転がり落ちています。判断の三原則で今の日本を考えると、本質的には国としての体をだんだんさなくなってきました。きちんと対応しなければ日本は滅亡に至る、そういう道をまっしぐらに歩いている年だと思っています。政治家も官僚も皆、阿呆ばかりになりました。なぜそう言うかといえば、国を栄えさせるためには減税でなければならないのに、増税、増税とやり過ぎています。

・コロナは死亡しないことが肝心

コロナは今、拡大中です。コロナが流行り出した頃、厚生労働省は何でもかんでもコロナ死として届けさせました。笑い話ですが、コロナに罹った人が車でお医者さんに向かう途中で事故で亡くなった場合、コロナ死と届けなさいという指導でした。現在は、コロナに罹って亡くなった場合、直接の死因を届けることになっています。直接の死因は肺炎が多いと聞きますが、そうすると肺炎として届けなさい、コロナ死で届けてはいけないというのが厚労省の指導です。どうしてこれだけ変わるのでしょうか。私はその後ろにあるもの、コロナで誰が儲けたか、どの国が儲けたか、その視点で見ればコロナの実態が見えてくるであろうと思います。

いずれにしても我々は、コロナに罹らないこと、死なないことです。コロナワクチンを打ったことによって亡くなる人も、当然ながらだんだん増えています。ですから私は今、コロナワクチンも含めてコロナという括りで考えています。とにかく、コロナで知らないことが肝心だということを念押し致します。

・今年は騙されないように

フェイクニュースが何と多いことかと思えます。前回お話ししましたが、池上彰さんは「新聞は客観報道を装う」という言い方をしています。客観報道を装うという事は、嘘をつくよという意味です。したがって今は、嘘が当たり前になっている。戦争も嘘の付き合い、騙し合いになっています。日本の国の中も、フェイクニュースが嫌になるほど広がっています。ですから、フェイクニュースに騙されないように気を付けましょうと申し上げています。

最後に、気になった新聞記事について少し申し上げます。

9月9日の朝日新聞に郵便局の話がありました。おばあさんが郵便局に預けている預金を下ろしに行った。そうすると、あなたの貯金は国がもう没収しているから下ろせないと言われてしまった。一体これは何なのでしょう・・・という記事です。

消えた郵便貯金の返還請求は、過去5年で4960件あったそうです。そのうち、返金されたのは1700件、返されなかったのが3260件です。なぜそういう事が起きたかという、満期を過ぎて20年経つと郵便貯金は消滅するという法律がありました。2037年まではその法律は有効だから、今後も続くであろうということです。

そして驚くことに、転居等で分からなくなって消滅してしまった貯金は、2021年度で12万件もあり、金額にして457億円が国に没収されました。私が言おうとすることは、国が没収したというところです。

それから9月9日の日経新聞の記事です。社会保険料を現時点で滞納している事業所は14万、そのうち差し押さえた事業所は22年度で2万7784件、前年度の4倍差し押さえをしています。差し押さえられた所は、ほとんど倒産しています。差し押さえをして国にお金が入りましたから、これまた国が収入をあげているという話です。

もう一つ、インボイス制度が10月から始まります。消費税を全部残らず取るというものですから、弱者救済ではなくて弱者消滅に向かうのがインボイス制度です。これも国の収入を上げるための制度です。マイナンバー制度は、隠しているお金を残らず洗い出し税金かけるというものです。

何度も申し上げますが、日本の国は終戦直後、財産を全部申告させて、一番多い場合は90%の税率で税金をかけました。大金持ちは90%、中流の人は50%程度、低所得者でも10%~20%くらいの税金をとられたようです。そういう時代が目の前に迫っています。

税金だけでこれだけの事をするわけです。それでは足りなくて、税金の滞納差し押さえて国はお金をとる。郵便貯金の権利消滅でお金をとる。目に見えないところで、国は必死になって収入を増やしています。今は、そういう時代に入っています。

お時間になりました。以上で本日の講話を終了致します。